特104
577

大正三年四月三日大島舞臺開
四日故大島景翁追善

能樂觀覽の枝折

始

目次

備考　一
翁　三
繪馬　四
田村　五
羽衣　七
芦苅　八
小鍛冶　九
嵐山　十
加茂　十一
盛久　十二
隅田川　十三
花月　十五
海人　十六
和歌　十八

特104
577

能樂觀覽の枝折

備考　能に小書なるものあり是は替の形にして秘事に属し（所謂傳授のもの）形の運ひ謠の緩急等普通と大に異なる也今回催の内に小書あるは繪馬の女体、羽衣の舞込、小鍛冶の白頭、海人の七段懐中の舞也其大略異なる点を左に記す

繪馬の女体　普通は後シテ天照大神男体なるが女体となる又普通は後ツレ天女二人にて神樂合舞なるを女体の時は後ツレ一人は天女、一人は力神也（是亦傳授物なり）五段神樂の三段迄を天女舞ひ其後を力神舞ふなり其他謠の緩急、形の運ひ普通の繪馬と大に異なれり但女体は喜多流にあるのみなり

羽衣の舞込　普通の形は能の終尾（霞に紛れて失にけり）舞臺の内にて舞止めて通常の歩みにて幕に入るを此形は橋掛りにて舞ひ〳〵幕に入

正3.3.23
文内

り脇の方も霞がくれ、脇止め(是亦傳授物なり)となり一層優美にして餘情多からしむるなり

小鍛冶の白頭　普通は後シテ稲荷明神、赤頭にて出るを白頭にて出るなり同し稲荷明神にても位高きものと云ふ事を示す也是亦形及謠の緩急普通と異なる所多し

海人の七段懐中の舞　普通は後シテ早舞五段なるを七段の舞となり形も異なるなり

附祝言とは通常の催なれば最尾の能、終りたる後、地謠にて何か目出度謠を二三句諷ひ之れを附祝言とす然るを翁の有る日には必らず附祝言は能を以てす是は翁の神聖なるに對して斯くするものなり

半能とは都合を以て後段だけ演するものなり

前日ノ部

翁

シテ　翁　狂言　千歳　三番叟

翁は天照大神、千歳は高良大明神(一説八幡大神)三番叟は住吉大明神(一説春日大明神)に象りしといふ説其他數説あれとも兎に角古來神聖の曲として尊べり最初に翁の諷ふ、とう〳〵たらりら、のとう〳〵は波の音、鼓は即ち波の音也たらりは波の、なめらかなる心又あがりらゝりは神德を明にするの意、どうは至善に止まると云ふ義其心は四海波靜に御世治まり神と君との恩德は明らかに世に流布し萬民之れを受けて至善に止まるとの意なるよし

幕あがると千歳両手に恭しく面箱を捧けて出で續て翁、三番叟と順々に出で種々の式あり千歳まづ舞ひ次に翁の舞あり舞の品位高くして嚴肅なる

觀る人の襟を正さしむ次に翁がへりといへるが濟みて三番叟は揉の段を舞ひ次で鈴の段を舞ふなり囃子方小鼓三人は翁に限るなり中央なるが頭取其左右なるが副役にして脇鼓といふ

翁は能樂中最も神聖なる秘曲として尊ひ昔は之れを勤むる役者は前以て別火潔齋し當日は翁飾と稱へ翁の面を神躰として安置し神酒を供へて舞臺に出る人々一同之れを戴き特に身を清め心に誦文など唱へてするを古例とせり

繪馬

女体

ワキ　勅使　シテ　前　里の翁　後　天照大神　ツレ　前　里の姫　後　天女（天鈿女命）力神（手力雄命）

所は　伊勢　季は　十二月

伊勢齋宮繪馬の神事を作れるなり昔は齋宮の森に小舍ありて十二月三十日の夜に繪馬を懸くる例なりしが其起りは又其古に齋宮とて太神宮の奉

仕の皇女住み給ひし時、十二月晦日爰にて大祇あり其祇の料に馬を牽きて來る事ありしを其後儀式廢れて後繪にかける馬を奉りて舊式を存せし意味ならんと云ふ來年の吉凶を占ふ樣は此文中に見へたり

此能前段は大炊の帝の臣下勅を蒙つて伊勢大神宮に詣づ折ふし節分にて人々繪馬をかけ來年の安らけく五穀成就せん事を祈る日なれば其樣子を見ばやと參籠せしに二人の老夫婦現れ來り二つの繪馬をかけ爭ひしが、やがて両人一緒に人民快樂國土豊かの繪馬をかけ今は何をか包むべき我等は伊勢二柱の神、夫婦と現し來りたり信すべし〳〵疑ふなとて失せ後段は月明らけく澄み渡る頃再ひ現れ給ひて天照太神、あまの岩戸に隱れ給ひし時諸神岩戸の前にて神樂を奏し太神の之れを窺はせ給ふを手力雄命、岩戸を引開けし時の有樣など見せて明らけく豊に治まる御代を示し給ひし事を演ず

田村

ワキ　旅僧　シテ　前　童子（田村丸の化身）
後　田村丸の靈

所は　京都　季は春

坂上田村丸、觀音の佛護に依り鈴鹿山の鬼神を平けし事を作る

此能前段は旅僧、清水寺花盛の頃童子に出遇ひ同寺の來歴を聞き又山々の名所を尋ね問ひ其尋常の人ならざるを知り其名を問へども答へずして田村堂の内陣に入り失せ後段は旅僧夜もすがら讀經なしつゝありしに已に夜も更けし頃甲冑を帶したる武將顯はれ坂上の田村丸なりと名乘つて往昔觀音の佛護に依りて鈴鹿山の惡魔を追討せし樣を見する事を演す

田村丸の事は日本後記にあり清水寺觀音に付いての緣起は水鏡にあり

此曲前半は艶陽三月天も花に醉へる頃名所敎へより轉して月花の美景に移りて艶麗を競ひ後半は鬼神退治の武功と佛力の廣大なるを說きて雄快を極む他の修羅物の如く罪業なく妄執なく如何にも清淨にして美しく勇ましゝ

羽衣

舞込

ワキ　漁夫白龍　シテ　天人　所は　駿河　季は春

天人降りて三保の松原の松の枝に其衣を懸け居りしを漁夫白龍其美麗なるを見て拾ひ持歸らんとせしに天人出て來り夫れは我が衣なれば返し呉れよと云ひしに返付せざりしかば天人は其衣なくては天に歸る事叶はぬを歎き悲み懇請せし末、再ひ是を着る事を得て其喜に霓裳羽衣の舞をなし上天する事を演す

此作は本朝事跡考又は本朝神社考杯に依りしものならん

此曲其衣を拾はれて天に歸る事叶はず悲む所一篇の眼目也其悲しむ樣如何にも優美にして所謂哀んで傷らざるもの謠曲の内に此作の如く精神高尙にて餘情遠大なるもの比類稀なり又疑は人間に在り天に僞なきものといふ所古來名句と稱へり

蘆苅

シテ　日下左衛門　ツレ　同人妻　ワキ　従者

所は　攝津　季は春

播州日下の里に左衛門と云ふ人、運拙くして夫婦分れを爲し女は都に上りて貴人の家に乳母となり年月を經て蓄へも出來たるに依り故郷の男を尋ねしも知れず從者は之れを慰めんとて芦賣る男を連れ來りしに芦賣は笠盡しの舞(所謂笠の段)など舞ひて興を添へしが計らざりき此芦賣こそ尋る夫なりしも男は身を耻ぢて姿を隠せしを漸く探がし出だし元の夫婦になるやう話調ひたれば祝とて男は舞をまひ打つれて都へ上れる事を演す

此作の出所は大和物語なり

此曲、妻は一旦貧に落ち又蓄が出來ても貞操の精神は一貫變ぜず夫は清貧に安んじ、御津が濱の問答より所の美景を捕へ笠の縁をたどりて打興ずるは曲中第一の要所也前半は優雅に後半は快活に清秀の氣の通する所此曲

の骨子ならん

小鍛冶

白頭

大臣　橘道成　ワキ　三條小鍛冶宗近　シテ　前童子(稲荷の化身)　後稲荷明神

所は　山城　季は雜

宗近、御劔を作るべき勅命を蒙り神助を得て打調へし事を作る前段は勅使、宗近の宅に來り御劍を作るべき勅命を傳ふ宗近恐懼に堪へず其氏神稲荷の社に詣て祈願せんと歩みを運びつゝありしに意外にも突然後ろより童子顯はれ呼掛けしに驚き顧れば童子は御劔を打つべき勅命ありし事を己に知れり宗近益々不思儀に思ひしに童子は和漢に於て劔の威德ありし故事を縷々述べて先々勅命の御劔を打べき檀を設け我を待ては必らず來りて助力すべしと云ひ捨てゝ行衛も知れずなりたり後段は宗近祭檀を設け丹誠を籠め祈念せる折柄稲荷の神体來現し宗近に力を添へ御劔を打ち調

へ之れを勅使に奉り其身は稲荷の峰に飛ひ去る事を演す
此曲尚武の氣と敬■神の心を表し得たりと云ふべし

嵐山

ワキ　勅使　シテ　藏王權現　ツレ　木守明神　勝手明神

地は山城　季は春

亀山天皇、吉野山の櫻の種を取り嵐山に植ゑさせ給ひ勅使を遣し見させ給ふ時、花守の老人夫婦ありて曰く此所の櫻は元と吉野山の櫻なれば折々は木守勝手の二神影向なる神木なり名は嵐山と云へど神風は妄りに花を散さゞるのみか神の御名と風に勝つて木を守るとは云ふなりと語り夕雲に乗りて吉野の方へ飛去りぬ(已上は前段也今回は半能なる故演せず此後段のみ演ず)稍ありて此二神嵐山に神遊の様を見せ尚吉野の本社藏王權現の來現あり花にたはむれ梢に翔り久しき春の様を現して失せたる事を演ず

翌日ノ部

加茂

ワキ　室明神の神職　シテ　前里の女　後別電神　ツレ　前侍女　後天女

所は山城　季は六月

加茂明神の奇特を作れり前段は播州室の明神の神職、水無月の風薫る加茂の社に詣づ、河原を見れば新らたに壇を築き白木綿に白羽の箭を立てあり不審に思ひて、折から水汲みに來れる女に其謂れを問へば此箭こそ加茂の御神体なりと語り神德を告げ知らしめん爲に現れたるなりと云ひて姿を消し後段天女及ひ別靈の神現はれ種〻奇特を示す事を演ず

此作山城風土記に依りたるものなり

此曲前段は神々しく心身自づから清らかなるを覺へしめ後段は神威のあらたにして壯烈なる様を感せしむ

盛久

ワキ　土屋三郎　ツレ　太刀取　シテ　主馬盛久

所は　京都より鎌倉　季は春

平家の侍、主馬の盛久、囚はれて己に斬首せられんとせしに佛護に依り赦免せらるゝ事を作る

盛久、源氏方に囚はれ京都に居る土屋三郎の内に預けられしを賴朝の命に依り急き關東に下だる事となり盛久は清水の觀音に後世の祈念を爲しつゝ今を盛と咲ける京都の花を後とに見て鎌倉に着し此曉には誅せらるべき事となりたる其暫時の間觀音經を讀誦し己に時刻近づきければ警固の武士に引立てられ由井が濱に着し斷頭場裏に座し清水の方に向ひ經文を披きて待つ、太刀取、後にまはり太刀振りあげしに太刀は落ちて段々に折れたり盛久意外の事に茫然たりしに立會せし土屋三郎は是れ全く此程誦讀せし御經の功力なりと云へり賴朝此奇變を聞き盛久を御前に呼ひ寄せ我は今夜不思儀の靈夢を見たり盛久も夢みたるべし其樣子を述べよと命し盛久は夢に老僧清水の方より來り年來の祈念に依り身代りに立つべしと云ひ夢は覺めたりと答へしかば賴朝は夢の有樣符合せるに依り信感の餘り其罪を赦免して宴を開く、盛久は悅ひの舞をまひ退出する事を演ず

此作は長門本平家物語に依る

此曲は武士の從容死に就く事(命を惜しまず只後生こそ悲む意に文中に見へり)と佛護の奇瑞とを顯はす先つ雄壯を骨子とし或は優雅に或は沈痛に或は悲壯に或は莊重に或は快活にあまたの變化あり

隅田川

ワキ　渡し守　ツレ　旅人　シテ　梅若の母　子方　梅若の亡靈

所は武藏　季は三月

狂女あり失ひつる子の行方を尋ねて京都より東國まで下りしが、隅田川の渡し守より其子の末期の樣子を聞き空しく其墓前に念佛を手向くる事を

作る尙委敷云へば都北白河の女、其一子梅若丸が人買に誘はれし行衛を尋ねて心狂ひ、隅田川まで來り渡舟の中にて向ひの岸に多人數念佛を唱へ居るを聞き夫れに就いて船頭の物語りを聞くに

都北白河に吉田の何某と云ふものゝ一子人買に誘はれ奥州に下る途中此渡にて不快になり路次に捨てられ病重くなりて遂に空しくなりぬ對岸の柳は幼き者の遺言にて墳のしるしに植へたるもの也今向ふに當つて人の集れるは此兒の死せしは去年の今月今日なれば大念佛を唱へ吊ふ也と

狂女は猶も委細を船頭に問へば是は現つゝか其幼兒こそ今迄尋ね居りし我子梅若丸なりと知れ母の悲歎極りなし乍去今更悔ゆるも及ばず船頭の慰諭に依り夜に入りて思ひ直し人々と共に念佛せしに塚の内よりも聲を發し共に念佛を唱ふ其幼な聲に母は驚き塚前に於て更に念佛を唱れば其聲の中ちより梅若丸の亡靈現れ出で母子名乘あひ互に手に手を取り交せ

んとせしも梅若丸の姿はまぼろしと消へ夜もしら〻の塚に草のみ茫々と殘れる樣を演す

此曲悲哀極まれる中に突然都鳥に付ての問答を生し忙中一閑、優美となり又其鳥よりして我が思ひ子の事に及び母の子を思ふ情、盡し得たり折角見へし愛兒の幻容また消失せて唯殘れるものは觀覽人のハンカチーフに涙の痕のみなり

花月

ワキ　旅僧　シテ　花月　所は　京都　季は春

筑紫彦山の麓に住居する左衞門と云ふもの一子を持てるが七つの歳に何所とも無く失ひたるより出家して諸國修行を思ひ立ち先づ部に上りて清水寺に參り花を眺むる處に一人の壯年者來れり人呼んで花月と云ふ境内の者彼に勸めて歌など諷はしめ居たる折から鶯來りて花を散す花月、楊由の事など思ひ浮べて持ちたる弓に矢をつがひ、ねらい寄つて射んとせしも

殺生戒は破るまじとて此寺の謂れを語り出だせり左衛門は熟々彼を視れば我子に能く似たるより問糺せば案にも違はず花月は七歳の時天狗にさらはれし事共語り、喜ひの餘り鞨鼓を打ちたる後、共に修行に向ひぬる事を演ず

海人

七段續中の舞

子方　房崎大臣　ワキ　従者　シテ　前　海人女（實は房前大臣の母の亡靈）
後　龍女（海人女の亡靈）

所は　讃岐　季は秋

藤原房前の母は讃州の海人なれとも來歴の委敷知れざるを悲しみ母の故郷を訪ひて其亡靈に逢ふ事を作る前段は房前大臣が從者と共に其母終焉の地なる讃州房崎の浦■に至り海人に出遇ひ海人は左の物語を爲し且其當時珠を取揚げし所作を爲して見する（所謂玉の段）

前年唐土より本邦え渡せし名珠が此浦にて龍神に取られしを淡海公（房

崎大臣の父）之れを取揚げん爲に此浦に來り或賤き海人と契を結び其海人に海底の名珠を取揚げん事を賴しに海人は其腹に生みし子（即ち房崎大臣）を世繼に立てたまはば取揚んと約し我子の爲ならば命も惜しからじと心に觀音を祈念し一つの利劍を拔持つて大冒險に漫々たる海底に飛び入り龍宮に至り名珠を奪ひたりしに是を守護せる八龍又は惡魚に追はれ身体茲に谷まり自ら乳の下を搔き切り之れに珠を押込め一死遂に名珠を取返したりと

右終つて海人は我こそ其海人の幽靈にて御身の母なりと名乘りて海底に入り失せ、後段は房崎大臣が吊ふ讀經にひかれて龍女（海人の亡靈）現はれ出で法華經の功德を述べて此吊ひを感謝し又志度寺の榮ゆるも一つは法華經の功德一つは子の母を思ふ孝心深きに因ると云ふ事を演ず

此作俗說なれども四度寺緣記、大織冠物語などの書より取りたりと云ふ

此曲前段は親子の情を顯はすを主とし後段は妙經の德を示すを眼とせり

或人の曾てよみし和歌の中に今回の催にあるもの

翁　鶴亀とうたう翁のひとふしに所も千代と舞おさむらん

うちとけし聲きく時はおのづから心も春になる瀧のみづ

田村　今もなほ世に聞えけり鈴鹿山ふりにし跡の木がらしの聲

鈴鹿山たかきいさをは伊勢の海の波にひびきて世に聞ゆなり

羽衣　さらばとて天の羽衣あたふれば乙女も舞の袖かへすなり

いつはりのなしといひつる言葉こそ衣にまさるたからなりけり

芦苅　花の袖雲井にきえて松原の霞に殘るあとの春風

君なくてあしかる程もなにはづにまた立かへる春ぞうれしき

小鍛冶　白波も花に靡きて歸るなり難波の浦の芦のはる風

真心を神もたすけて打つ太刀の光くも井にとほらざらめや

加茂　いづくとも誰かは人につげ白羽の矢こそは神のしるしなりけれ

盛久　ちる身ぞと思ひすてゝも法の花ひらけし時は嬉しかりけり

隅田川　いたづらに母のなげきや招くらんしるしの柳はるは歸らで

夜もすがら塚の小草におく露はとむらふ母の涙なるらん

思ひ子の姿はきえて母親の袖の涙に月ぞのこれる

子を思ふ心のやみに隅田川あわと消えにし影やみゆらん

我子かと見し面影もしのゝめの明けて跡なくなりにけるかな

花月　又さらに雲路にのぼる心地してともなはれ行故郷のそら

海人　まよひつる子故の暗もおしこめし玉の光にはれわたるらん

子を思ふ海にいのちを捨てこそ龍の宮居の玉も得にけれ

能樂觀覽の枝折終

大正三年三月十七日印刷
大正三年三月廿二日發行

廣島縣深安郡福山町字東町百九十四番地
著作者　齋木定郎
廣島縣深安郡福山町字今町四百四十二番地
發行者　鈴岡禎太郎
廣島縣深安郡福山町字東町八十一番邸
印刷者　小林文吉
廣島縣深安郡福山町字東町八十一番邸
印刷所　小林活版所

216
497

終